

宿縁

五月号

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号

浄土真宗
本願寺派
中原寺

TEL 〇四七―三七二一〇二九二
FAX 〇四七―三七二一〇二六二

桃太郎は善人か 鬼は悪人なのか



Eテレで「昔話法廷」という異色法廷ドラマがあるのをご存じですか？
日本の昔話「桃太郎」「カチカチ山」「舌切り雀」などや、外国の童話「赤ずきん」「白雪姫」などを題材とした判決のない法廷ドラマが展開されてゆきます。
たとえば主人公の「桃太郎」や「サル」・「赤ずきん」が被告となり、裁判員を前にして検事、弁護人、証人などがそれぞれの立場で弁論を展開し、なじみ深い昔話の登場人物を裁く法廷なのです。判決は出ずに、あくまで

視聴者にゆだねるというものです。有名な俳優さんが熱演し、見るものに「考え方を養う」のがこのドラマの趣旨だそうです。
国民の中から選ばれる裁判員が、刑事裁判に参加する制度つまり裁判員制度が平成二十五年の五月に導入されましたが、この法廷ドラマは人が人を裁く難しさをつくづく感じます。本来主観的見方をしていて私たちが、どこまで物事を客観的に見る事が可能なのか、まさに正確さは「神のみぞ知る」ということになるのでしょうか？
さて、人間世界を超えた真理(真実)を説く信心の受け止め方にさえ人間は嘆かわしいことと、したためずにおられなかった親鸞聖人の門弟唯円さんの「歎異抄」はあまりにも有名です。そこには人間の心の限界、つまり煩惱から抜け出ることのできない人間の存在を嘆かれています。
後序には親鸞聖人から教えを受けた唯円さんの次の言葉があります。
『親鸞聖人がつねづね仰せになっていたことですが、阿弥陀仏の五劫もの間思いをめぐらしてたてられた本願をよくよく考えてみると、それはただ、この親鸞一人をお救いくださるのであった。思えば、このわたしはそれほど重い罪を背負う身であったのに、救おうと思いつくたてた阿弥陀仏の本願の、何ともったいないことであろうか』と、しもじみと

お話になっておられました。……
もったいないことに、親鸞聖人がご自身のこととしてお話になったのは、わたしどもが、自分の罪悪がどれほど深く重いものかも知らず、如来のご恩がどれほど高く尊いものかも知らずに、迷いの世界に沈んでいるのを気づかせためであったのです。
本当にわたしどもは、如来のご恩がどれほど尊いかを問うこともなく、いつもお互いに善いとか悪いとか、そればかりをいいあっております。親鸞聖人は、「何が善であり何が悪であるのか、そのどちらもわたしはまったく知らない。なぜなら、如来がそのおこころで善とお思いになるほどに善を知り尽くしたのであれば、善を知ったといえるであろうし、また如来が悪とお思いになるほどに悪を知り尽くしたのであれば、悪を知ったといえるからである。しかしながら、わたしどもはあらゆる煩惱をそなえた凡夫であり、この世は燃えさかる家のようにたちまちに移り変わる世界であって、すべてはむなしくいつわりで、真実といえるものは何一つない。その中において、ただ念仏だけが真実なのである。」と仰せになりました。(現代語訳)
これは、世の中は諸行無常で念仏だけが本物だという意味ではありません。私たちの「こうあるべきだ」と信じ込んでいることに對して、「それは本当ですか」という問いかけであり、それがお念仏のはたらきなのです。
日頃私たちの生き方のモノサシはあらゆるものに値段をつけたがりですが、南無阿弥陀仏には値段がつけられません。形がないの

で、割れたり壊れたりする心配もありません。親鸞聖人は「和讃に「浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし 虚仮不実のわが身に 清浄の心も さらになし」とあります。浄土真宗に帰依したからこそ自分の本物の姿が見えてくるのです。本物を手にしたい、本物になりたいと思う私たちには不思議な話ですが、それがお念仏の功德だといわれています。
まことの信心は、どんなことがあっても「この私を捨てない」という阿弥陀さまのお心(はたらき)ひとつをいうのです。
「観無量寿経」には、父親を殺し母をも殺めようとしたアジャセが、犯した重罪にもがき苦しむ姿が描かれています。しかし大臣のギバ独り、「善いかな、善いかな、王(アジャセ)罪を作すといえども、心に重悔を生じて慚愧を懐けり」といいます。これは罪を犯したことを問題にするのではなく、そのことをどう受けとめるかということの問題にしています。罪の意識に苦しみ悩む、慚愧がアジャセを救うということですから。そしてアジャセが仏の教えを受けて最後に立ち上がっていく時にこういいます。「釈尊、もしわれ審らかによく衆生のもろもろの悪心を破壊せば、われ常に地獄に在りて、無量劫の中にもろもろの衆生のために苦悩を受けしむとも、もつて苦とせず」と。衆生の悪心を破壊することができるならば、自分は地獄に墮ちても、それを苦としないと、いうことです。
ここに阿弥陀仏の人智を超えた救いが顕わされています。「地獄一定住み家」の親鸞聖人の目覚めが、同時にすべての人の真の人間性回復であることを示されています。

【寺灯雑記】

○婦人会会員の卒寿を祝う

三月の婦人会法座にて九〇歳のお誕生日をむかえられた花田淑枝さんの卒寿をお祝いし、花束が贈られました。卒寿になられても率先して法座に参加され、聴聞をされている姿は多くの会員の励みとなってくれています。

これからも益々元気に、ご一緒にお念仏させていたきたいと思えます。

○コロナ対策を施し、花まつり開催

4/4

境内の枝垂れ桜が満開を迎えるなか、二年ぶりに子ども花まつりを開催し、お釈迦さまのお誕生日をお祝いしました。今回は、コロナ感染対策として事前予約制としましたが、約二十組が参加してくださいました。本堂での読経や住職から仏さまの話の聞いたり、お釈迦さまに甘茶をかけたたり、普段なかなか体験することがないことばかりでしたが、慣れないながらもお寺でのひと時を過ごしていました。

また、楽器を使ってリズムゲームやフォトフレーム作りなども行い、帰りにはお菓子と花のお土産もお渡ししました。外出しづらいうご時勢のなかで思い出となる一日になってくれたかと思えます。

○入門式に五家族が受式

4/18

浄土真宗門徒として当寺とのご縁を結ばれる入門式が行われ、五家族の方が出席されました。

式では真宗宗歌の唱和、ご住職より門徒式章と経本と門徒必携の授与、受式者の焼香の後に代表者による浄土真宗門徒としての「誓いの言葉」が宣べられました。

また、引き続きの常例法座では、ご講師の熊原博文師より、喜びや悲しみや苦しみを抱えて生きる私に寄り添ってくださいる阿弥陀さまのおはたらきをお伝えくださいました。

左記の方々が新しく御同朋のお仲間になりました。これからよろしくお願いいたします。

- * 荒田みどり様
- * 川崎香代子様
- * 楠原秀俊様
- * 中島敏夫様
- 奥様
- * 大和義行様

【仏事のイロハ】(お仏壇)

人口の流動化や核家族化などの社会情勢の変化によって、最近では、何世代にもわたって同じ家に住むことがめっきり減り、次々と新しい家が建ち、また引越しも頻繁に行われています。そうして移り住んだ家には、特に若い世代を中心に、昔ほどの家にも必ずあったお仏壇が、安置されていないケースが増えてきました。

「まだ誰も死んでいませんから…」とか「仏壇はいなかにありますから…」といった理由からですが、考えてみれば、「私」につながる数限りもないご先祖の方々が亡くなつていったはずですよ。

こうした言葉の裏には、お仏壇が、今生きている家族の誰かが亡くなって初めて必要になるものであり、ご先祖にしても長男などの誰か一人が「面倒を見れば」事足れり、といった認識があるようです。つまりお仏壇は「死者や先祖をおまつりするのためのもの」と思っているのです。

お仏壇というのは、文字通り「仏さまをご安置する壇」のことです。仏さまとは、言うまでもなくご本尊である阿弥陀仏(如来)のこと。ちよつとしたことにこだわり、悩み、自己を見失いがちになる私をしつかりと抱きとめて、決して崩れることのない安らぎを与えてくださる阿弥陀さまです。お仏壇は、そうした私の心の依り所となり、家庭の精神的基盤となつて下さる阿弥陀さまをご安置するために設けるのです。

心の問題が山積している昨今、家族そろつて阿弥陀さまに手を合わすことが、どれほど心豊かな家庭生活につながるかわかりません。ですから「いなかにあるから…」とか「長男だけでよい」などと言わず、阿弥陀さまをお迎えし、手を合わす日々をおくってみませんか。

(本願寺出版社「仏事のイロハ」より抜粋)

【法要・法座のご案内】

☆宗祖降誕会・永代経法要式次第

・五月十六日(日) 午後一時より

(時間が変更となりました)

*親鸞聖人降誕会

献灯献花

おつとめ:「さんだんのうた」

*永代経法要

おつとめ:讚仏偈

法話:住職「誕生の意味」

法話:前任住職「先立つ人は善知識」

○お仏具磨き・清掃奉仕

*五月一日(土) 午前十時

○婦人会法座

*五月一日(土) 午後一時

おつとめ:正信偈

「昔話法廷」鑑賞と座談

○教行信証を学ぶ(信巻)

*五月二十九日(土) 午後二時

講師:前任住職

○婦人会法座(正信偈解説)

*六月五日(土) 午後一時

法話:前任住職

○壮年会法座(阿弥陀経解説)

*六月六日(日) 午後三時

法話:住職

【五月の掲示板のことば】

あなたの品位がわかる

喰う!

食べる!

いただく!

※「YouTube 中原寺」で検索

月二回の割合で前任住職の法話配信中